

慈

光

第十八卷

第十二号

近角常親先生特輯号

人生抵抗の剿絶さうぜつと

無抵抗主義の誤謬ごびゆう

昭和二十四年七月二十三日
昭和四十一年十二月十五日
第三種郵便
（毎月一回五日発行）
（認可）

（通第二一一号）

人生抵抗の剿絶と 無抵抗主義の誤謬

近 角 常 観

一 人と平和を保つためには

常に言う如く、我々が、

「自分が正しいと言って、自分が正義なりと言って、自分を主張する限り、人生に平和は現出せぬ」

故に自分の方が人に譲りて、人に敗けて人と平和を保とうと、先ず大低の人が少し考えた時は、常識としてこの方に出ようとする。私も子供の時より、喧嘩する時は、敗けるが勝ちだ、の教育を受け、自分の方から人に敗け、

「人に頭下げても平和にやっ行って行こう」

と、かく考えて居ったことである。こは所謂無抵抗主義という如き意味からではなかったが、とにかく人の善し悪し言わずにやるでなければ、事実平和に保たれぬから、そういう風に考えて居ったことである。こは今日の若干の理想ある青年は、皆この風の考えであるうと思ふ。青年諸君が人と争うて行ってよい位ならば、苦心せられることは無いのであるから。争い隔てるのはいかぬと考える故、そこで

飽くまで争わず平和に行く為には、自然とそういう風の考えになつて来ざるを得ぬのである。

二 私の無抵抗は大抵抗であつた

ところで、毎に云う如く、かくして飽くまで人と平和に行くためには、

「勢い自分を犠牲にし、損し、何程他から争われようが自分からは争わず、何処までも譲りて忍んで行く」

となるのである。こは私のはトルストイ翁の無抵抗主義なぞを知つたのではなかった。全体、

仏教には無我ということがあつて、何処までも自分を空しくしていく教ゆえ、私はそれだと思つて居つたのである。ところで、それで絶対にやり通して、

私が安心出来たかというに、否。私がかく人に譲りて、自分の利益を投げ出してやればやる程、最後に如何なる考へが出て来たかというに、

「自分はこれ程善くして、正しくしている。それに、自

分が、これ程犠牲になつて、いることを人が認めてくれぬ。

これ程争わずにやつて、いることを人が見て呉れぬ」

と、これになつて来たのである。これは私が本当にそれなら、何処までも人に譲りて満足して行けそうなるものであるのに、妙なもので、一方に譲り争わずにすればする程、

「俺は正しくしている。善くしている。これ程しているに人が認めてくれぬ。かほどにまで譲つて、いるに、人がこれに向つて争うて来るは、人がいかぬ」

と、この考えが、人に譲り、犠牲的にしている心の底に起つて来たのである。

初めはあえて無抵抗主義とまで思わぬも、自分は飽くまで争わず、自分を空しくして行く、——それで何処までもやる積りで、如何ほど無我にし、自分を捨てていつても、やればやる程

「俺はこれ程犠牲になつて居る」

この心が起つて来て今迄の犠牲がたちまち形なしにされてしまい、ここに実に今迄自分が無我にしようと思つておれば居るだけつらいところなのである。全体自分が犠牲になつて居るけれども、人が認めて呉れぬと言う。犠牲は、人に認めて貰いたいようなことで犠牲などと言ひ得るか。

犠牲は人が認める、認めぬなどであるべき筈がない。しかるに自分が犠牲をしているを人が認めぬと、不足の考へ

を持つて人を見る如きでは、初めから本当に犠牲などになれていやしなかつたのである。換言すると、自分がそれ程人に譲つたことを人が認めぬと、忽ち不足が出て来るは、犠牲どころか、初めから「人に譲る」、「無抵抗にする」という美名の下に、

実は、大いに人に対して要求して居つた、我慢を主張して居つた、ことであつたのである。こはすこし複雑で、能く味つて頂かねば分らぬところなのである。

三 無抵抗主義の誤謬

例えば今日言われて居る無抵抗なることは、人が自分の利益を取つても、自分は黙つて取られて居ることを、無抵抗と言つて居るようなのである。或は形は成る程そうであるかも知れぬ。けれど心中「我はこれ程人に譲りて居る、無抵抗にしている」と、一念この心を持つたとすれば、それは本当に、

無抵抗に出来るので無いと申すのである。このようなことはむしろ通俗に言うた方が分りよい。よく信者の人が「俺は信者故、人と争わぬ。俺は念仏称えるゆえ、人と喧嘩せぬ、黙つて居る、頭を下げて居る」

と、或は形だけはその通り行つて居ることはあるかも知れぬ。けれども自分の心中に立ち入つて見ると、表では立派に行つた姿して居るも、心では、

『我こそ従順に振舞っている、すなおに行っている』
と、この考えで人に向って居たのだとするとその心はどう
だろうと申すのである。ちっとも人に譲っているのでない、
無抵抗にしているのではない。

『我こそはこんな善くしている』の考えが中心で、む
しろしきりに『自分は善くしている、よくしている』と主
張しているのであるから、形は無抵抗でも、失張り、
無抵抗という一種の抵抗をしていることになる。故に無
抵抗は形では人と和らぐことになるかも知れぬも、心から
無抵抗にはなり得ぬのである。

『人は抵抗を以て来るも、我は無抵抗を以て行く。人は
横暴を以てやるも、我は君子人でいく』

と、……それなら我々は自分は善くして居るの根性ゆえ、
我は善くして行くの大抵抗になって、これでは何時まで
たっても安心出来よう筈が無いでないと申すのである。

四 蘭相如と廉頗

こは至りて簡単な問題である。ことに昨年(大正六年)
来の、露独の状態について考えて見ても、露西亜の方は武
器を捨て、軍備を撤して、戦いの意志無しという如き無抵
抗の態度で臨んだけれども、一方独逸の方が、好機乗すべ
しとして、どしどし軍を進めて侵入していくとなると、一
方武器を捨てて抵抗のして見ようなけれども、『あまり非

って行かねばならぬ』と、私はこの考えでやって居った者
なのである。

五 『世の中に吾は廉頗だ』というものが

あるものが

ところが、常に云う如く、かく蘭相如の潔白を理想とし
て行くことになる、私の内心、

『我は蘭相如である。彼は廉頗である』

と、この考えがどうしても取れぬことになって来たのであ
る。成る程、形では蘭相如の如く頭下けて人に譲っている
体になっているけれども、腹中にどうしても融けぬものは

『我は蘭相如なり、彼は廉頗なり』故に、如何程やりても
『俺がこの如く損をして居るのが本場に偉いのである、敗
けるが真実の勝ちなのだ』と、これになりて、故に一方も
どうしても頭を下げて来ぬのである。何故か、

自分ばかりが蘭相如顔して相手に向かうから、相手もどう
しても和らいでくれぬと、かくなつたのである。ここはよ
く注意せぬと、我々、

宗教などに心懸けると、直ぐ何か人より偉い者になった積
りになり『ウンあの男は無宗教だ。我々信仰を持つ者は』
など、妙に鼻息が荒いことになる。信者の人などに能くこ
れがある。『我々仏が無くば喧嘩するところであるも、せ
ぬ。併しあの男も分らぬ奴だ』と、これが出るは、そうい

道い仕方である』：事實はどうか、新聞ではレーニンが抵
抗しようと言つたという話である。即ち絶対の無抵抗は人
生に出来得ないというが、このことである。

又も一步緻密に考察すると、『我は無抵抗にしている』
との考えは、却って自分を高ぶり、人を見下して居るとこ
ろの思想である。いつも言う、私が信仰前に経験した思想
で『信仰の餘瀝』にも書いてあるのであるが、

昔、趙の国に、廉頗、蘭相如の二人の重臣があつた。二
人が勢力を争うて相戦えば、そこに間隙が出来て、敵に乗
ぜられてあぶないから、如何なることがあつても仲よくせ
ねばいかぬと、そこに着目した蘭相如は、自ら廉頗の下に
身を屈して、廉頗が如何なる態度で向かおうと、いつも廉
頗の下位に立って、無抵抗に出て居たというのである。か
く蘭相如が無抵抗にしていたため、喧嘩好きの廉頗も喧嘩
が出来なかつた。終に最後にいたつて、かく蘭相如が身を
屈していたのは、そういう尊い考えからであることが分か
り、さすがの廉頗も耻じ入つて、蘭相如の許へ飛んで行
き、旧来の暴状を懺謝して、刎頸の交りをするようになつ
たというのである。

私が考えたのは『蘭相如のやり方は偉い。我々宗教のため
にするのも、誰彼が善い悪い言うてはいかぬゆえ、他人
が如何にあるうが、自分の方は飽くまで献身的に、人に譲
う偉い者になつた積りで居るからである。そこで私、氣の
ついて来たことは、

『これは全体、俺が蘭相如だ』と云うているのが第一
に悪い。誰だつて世の中に我は廉頗だという者があるも
のか』

と、——ここは常に云う如く二本の棒が八形にある、如き有
様だと申すところである。一方から一方を眺めて『自分は
真直だけれど、向こうが歪んで居る』かく言うのである
が、一方からは『イヤ俺は真直だけれども、お前の方が歪
んで居るのだ』と云うのであつて、

全体どちらが本場に真実であるのか分らぬ。故に自分の
方より善くして行く無抵抗主義になると『俺は善くしてい
るけれども、向こうが』という。この『けれども』が
どこまで行つても残つて、しかもやればやる程強く起こつ
て来て、ここが実にこまることとなるのである。

六 トルストイは間違いに陥つた

そこで、今日は全体、トルストイの無抵抗主義の誤謬に
ついて話す積りでこういうことになつたのであるが、そこ
でそのことは何処からでも言えるのであるが、先きいう如
く自分の方から無抵抗に出るトルストイ風の行き方である
と、それから来る結果の如何は別として、前に言う如く、
真に絶対に何処までも無抵抗に行い得るか否かを考えな

くはならぬ。信仰からいうと、即ち、そこが罪惡觀の起る本である。我々思う如く何処までも人に譲り、犠牲的に不足なくやれるのならば、それなら我々は罪惡生死の凡夫ではない。『煩惱のなきやらんとあやしくそうらいなまし』の方である。それなら、此の世ながら仏の如くあり得る人である。故に私から言くと、

トルストイの間違いはここにある。勿論トルストイの無抵抗主義なる思想は一代の福音であって、私はそれを軽くは思わぬ。又ト翁がそれを宣伝するには、それだけの心的状態を経験してのことだと私は認めて居るのである。けれどもトルストイの教えるところにはどうしてもここに矛盾がある。私は、

設しト翁自身はその状態を経験し得たにせよ、それかといつて直ぐそれを持ち代えて格言となし、故に『人もその如くせよ』と人に勧めたところはいかぬと思うのである。

ト翁自身は或実験の結果、その体験したとするも、故に人にもその如くあれと人に求めた処は、

重さある自分の身体を自身で上げよと言つたと同然で、元来出来得ぬことであるのである。我々、

自己の身体の有る限り、自己を滅して飽くまで無抵抗になれと云うことは、本来出来得ぬ註文であるのである。こはちと激しく申したのであるも、しかし、

したのである。

八 眞解決の道は如何

処で無抵抗が出来得ぬだけを申すが目的でない、肝腎はトルストイの批評でなくて、信仰の問題である。我々かく如何にするも争いをまぬかれぬ五分五分の人間が、如何にして争いより脱却するか、安心するかの問題である。

以上申す如く、我々は如何にするも無抵抗は行えぬ。よし形で争わぬにしても、心では何処までも自己の主張をまぬかれぬとすれば、結局同じ争いの苦しみである。するとここを、何処で解決して救われるか、これを申さねば何にもならぬのである。

九 『自分が悪い』だけに了つては

無抵抗主義になる

こは大分思想問題的な言い方になったが、信者の方にも聴いて頂かねばならぬのであるが、甚だ露骨であるけれど、

も、とかく信者の人の間には、心に善し悪しの抵抗を起こして居ながら、それを案外平氣に止めぬ人があるようなのである。一つは眞宗を聞きそこなうとそれになり易い。何故なれば従来眞宗の勧め方に、『悪しくてよい、浅間しくて構わぬのだ』

の誤りがあって、悪しきは止まぬのだと言ふもの故、あつてもよいのだと、平氣で争いをして居る人があるように見受

私自身はこれ一つで長く苦しんだのであって、私の入信はこの一点で行き詰つたのであるから、ここは呉々もよく味わつて頂きたいところである。

七 『敵を愛せよ』の如きも矛盾なり

いらぬことなれども、さき頃、

『無我の愛』なるものが唱導せられたことがあった。あれは多少トルストイ主義を経験した結果の如くであったが、言ふところは、自己を捨てて無我に他を愛せよ、ということであつた。しかし現にそれを聞いて病氣快癒したという人があつた程だし、又言ふ人も若干実験があつて言つたものと考えて見るも、併し結局の処は、我々どうしても本当には無我になり得ぬというところで倒れてしまったようであつた。こは、もう一つ言えば、彼の

『敵を愛せよ』ということの如きも実に善き教えである。

併し事實に言つと、

人を敵と視た時はやすでに「愛する」はされなくなつて居るのである。はやすでに敵と視たことが、我に異見を抱ける者とか、我を迫害する者とか、然うした考えがすでに人を敵視して居るのであつて、しかもその上になお愛せよ、というた処が、それは、唯心に無理な苦しみを重ねるばかりのことになつてしまふのである。要するに如何程せんとするも、無抵抗ということは出来得ぬことであることを申

けるのである。こはもとより論にならぬ例であるが、併し氣をつけなくてはならぬのは、信者に限らず、とかく、

『自分がよい、人が悪い』

と思うのがいかぬの故、人を悪しく思うた自分が悪かつた、それだけに止まって居る人があることがある。而してうっかりすると、それで分つた積りで、そう言うているのが不徹底の状態であることに氣がつくことがむづかしいのである。

先年、私の話を聞いて下された或人が、

『自分の近しき者に、色々と世話してやつても、向うが有難いと感謝せぬ。そういう時、以前は、これ程善くしてやつても感謝せぬは向うがいかぬと思うたが、段々聞いて見ると、人に世話して、先方が有難く思わぬからとて可かぬと思うた自分の方が悪かつた。人を世話するに何も先方に、善く思うて貰うためにするので無い。向うが善く思わぬからとて不足に言う位なら、初めからせぬ方がよいのである。これは大なる間違ひであつた』

と。これに氣づいて喜ばれた人があつた。即ち、こういうてるのが、今の無抵抗に、不知不識に出て居るものなのである。

一〇 無抵抗を信仰的対度と誤解して居る人

処がそこまではまだ氣がつくのであるが、そこで行き止

つてしまふのが、信者の人に甚だ数多いのである。

しかし初めの氣に止めぬのにくらべると、ここまで行つたのは余程近くなつたのである。もとは人が善い悪いと人の善し悪し言うて居た人間が

『イヤ人に喜ばれようと思うて居た自分の方が悪つた』と頭の下がつたのであるから、即ち、

他から見ると甚だ感心な人とはなつてくる。成る程他から何程報われなくても『自分の方が悪いのだ』と言うて居るのだから、非常に結構なこととはなつて来る。

併し、これで何処に解決がついているか、考えなくてはならぬのはそこである。これは我々自分の方が悪かつたと氣がついて、何処までも人に下手に行こう、無抵抗にしようとなつた時、よくあり易いことである。よくこれまで氣強くやつていた人が信仰を聞いて

『これは今迄自分の方が悪かつた』

となると、随分周囲の者が自分に対して失敬な事をする。

或は自分のしたことを悪しく取つて色々とする。何程向うが悪しくやろうとも、

それに飽くまで善くして行くのが信仰の姿だ、と、それでやつて居る人があるのである。而してそう言うてその実、よけい苦しみをしている、となつて居るのである。而してそれ等の人がつねに私に言われるには、

『どうも貴方の信仰の姿で無いように思う』と。——即ちうっかりすると

『無抵抗がよい、黙っているのが本當である』

と、それでやつて居るのだとこれになる、一つ間違つと、昨年（大正六年）來の露國の崩壊はそういうことでもあるまいけれども、それでやつて居るのだとすると、確かにそれになり易き傾きがある。全体、レーニン、トロツキーはあゝいうことをしてどう思つてるか。ややもすればあの如き屈辱をして、

『イヤ、偉いことをやつた』

と得意の氣味で居るで無いか。それはまださもあるうとして、それで本當に無抵抗で通せるならよけれども、心は反對に、いよいよ益々險惡に成つて行くばかりである。若しレーニン、トロツキーが本當に無抵抗を信条として居るのなら、何故彼等は帝政に反抗したか。何故ケレンスキーに反対したか。これは要するに、無抵抗は人生で出来得ないことであることを申したのである。

同様に仏教の無我ということも氣をつけなくてはならぬは、無我を何処までも自分を滅して虚無に帰する、とする時は、今いふ如く、信仰上の意味合においても甚だ妙なことになる。

すると、我々人間のいう無我、無抵抗は、そうせんと努

めれば努める程、いよ／＼さういうて我慢を張り、抵抗して行くことになる。

こは青年諸君に『第一我々自身がかぬ』と言うと、普通に『イヤいかぬとは思わぬ。やれてるではないか』と言わるのであるも、そのやれてるが、恐ろしい抵抗性であることがこれで分かるのである。

故に、我々は無我、無抵抗にして人生に平和の現出を期するなどと言うても、いよ／＼となると我々は一分も一厘も譲れぬ。

いや平日、相當に人に物を与えて居るではないかと言うかも知れぬも、その与えるは、与えた人と思われたいからである。我々は平日人に物与えて『彼の人は親切な人』と何も形の上での報酬は受取らぬも心でちゃんとこの報酬をとりて居る。取りながら皆気づかずに居るのである。

一 善い事で苦しんで求めて

來られる人

故に随分善いことで苦しんで聴きに來て下さる方がある現にここに聴きに來て下さる或方、日露戦争の時、最初から、最後の奉天戦まで戦争して、終に最後の戦場で傷つき倒れ、万死に一生を得て、辛うじて生き帰つて來られた方である。その方は凱旋後、戦地に在つた時、部下兵卒との間に交した誓約を重んじ、色々に廢兵、遺族救護事業に

尽力して、終にそのため煩悶して聴きに來て下さるのであつた。私その時、その方に申したは、

『失礼ながら貴方、さういふ救恤事業のために犠牲になつたと言わるるも、それは本當に犠牲になつたのである。今貴君の苦しんで居らるるは、即ち貴君の心に八自分分は國のために是れ程した、是れ程善くした』の考えがあつて、

夫れ程善くしたのにその自分が立てなくなつたのだからそれで貴君は苦しんで居られるのである。第一この善くした善くしたの考えが甚だいかぬで無いか』と、申したら、その方は非常に驚かれたのであつた。

『成る程、言われて見ると自分は出征の時に、自分は戦死してもよい。併し死んでも國家の救護がある故、妻子には困らぬと、この考えがあつた。第一これをもつたのが、口には皇國のため』と言いながらも、その実、利益主義でやつて居つたのであつた。成る程、言われて見れば自分自身がさういふ自性で居りながら、今まで、自分は善くしている／＼と、これを思つて居るのが悪かつた。』

と、そこに大いに氣づいて下さるのであつた。即ちそこに居らるる橋地氏がその方である。最後の戦場で頭部に貫通銃創を受け、戦死者の中に数えられてあつた程の人が、

徒卒の親切でようやく生き返り、死んだ積りで廢兵のために
に尽くそう／＼と、遂に自分の立てなくなるまでやられた
程の人であるから『その貴君のそれ程やったと思うて居ら
るるのがいかぬ。本当にやれてはいぬではないか』と、そ
こまで言わなければならぬ。又それが若し本当にやれる位
なら、仏は要らぬことになってしまうのである。

一二 善し悪しのつき纏う限り

抵抗の生活

故に親鸞聖人は
疑心の善人ということを言うて居られる。善人は善人なれ
ども疑心の善人、疑い心の善人であるとのことを言われて
ある。即ち絶対に仏を疑うて仏を認めず、
我こそは絶対であると思つて居る善人である。そこへ行く
と信仰上、竜樹天親という如き大乘の聖者と雖も、我こそ
善人なりとの考えがある限り眞の善人で無いというのが、
聖人の思召である。すると善きことなれば善きにつけ、我
は善きことをしたとの考えがのこりて何うしても抵抗が止
まぬ。——全体、

救いは悪しきことにはばかりあるのではない。善きことにもあ
るのである。親は親心の上から自分の子供を哀れみ救い度
い。子は子で親に心配させていとしいと、悪しきことでは
ないが、これが愛情で相碍え、相抵抗しているものなので
その善し悪しについて廻る限り、何処までも抵抗の生活
と、こういうことになって来るのである。

一三 善悪同罪なり

故に

親鸞聖人は常に、善悪々々、ということを言うておいでにな
っている。『歎異鈔』末文には

聖人の仰せには、善悪の二つ総してもって存知せざるな
り。云々。

悪の方は咎めてよいかも知れぬも、善の方は左程咎めるに
もあたらぬようであるも、今の如く我々の善は、善が悪と
同じに罪なのだから、何処までも言わなければならぬ。人
を世話して礼言われぬと不愉快を感じるは、初め好意で尽
くして置きながらひどいことだと言われたのであるも、そ
の人は礼言われて喜ぶ方も罪であることは思わないで居ら
れたのである。故に聖人は、
善悪二業のことと言われて善も業の方に入れられてある。

世間的には悪はいかぬ、善はよいと、世間相對の善を採
り上げるのであるも、善悪はかくこちらの心に在るの故、
善を取上げる限り、悪も取上げなければならぬ筈である。
そこになると、悪のいかぬ限り、善もまたいかぬ。こは私

の苦しんだ時は、
善も悪もみな抵抗となつて、私の心を隔てさすばかりと

ある。即ち善いことと言うと、世間の善いということが皆
この通り、故に、
善い事がみな罪である。『イヤ、彼の男は盆暮に贈物を持
つて来る。よい男故、あれによくしてやろう』と、
抑々世の中の因果応報、流転苦惱の源は、この人生相對の
善い为本なのである。それは仏教上いろいろの言い方もあ
ろうが、我々の心の上では、

善いことされて善くするから、悪しくされると悪しくした
くなる。即ち何処までも善し悪しが自分について廻つて
脱れられぬ。故に普通に云うところの世間の善いが皆迷い
の種因である。いつも云うことであるも、新聞で悪口書く
のを我々罪だというて居る。反對に褒められた時は気持ち
がよい。この気持ちがいいが、悪しく言われて悪いと同じ
である。それを善く言う方はよいが、悪しく言う方はいか
ぬというて居るのであるも、ナニ何れも同じ五分と五分と
である。善く書かれて喜ぶ人間故、悪しく言われると腹立
てるとなつて来るのである。又、
互に慣れ合い妥協して褒め合つて居るのも罪である。この
点より云う時は、政府が政友会を引張つて居るのも罪、憲
政会を罵つて居るも矢張り同じ罪である。そこに行くと、
我々善いとか悪いとかを唯一標準として平日生活している
のであるが、

なつてしまつたのであつた。そこになると我々が一寸のこ
とで悲しみ、一寸のことで喜ぶ、これが皆抵抗とこうい
うことになつてくるのである。

さてこれで、我々抵抗の離れられぬことは分つた。その
抵抗の罪深き私が、しからは何処で安心するか。抵抗の文
字を換えれば仏教の、

五逆、十悪で申してもよいのである。我々は口にも言葉に
もかけられぬ五逆十悪の身の上であるという。それは親を
殺し、仏身より血を流す五逆十悪は我々せぬようである
も、現に親に抵抗し不足をいうて居るところの我々である
。即ち五逆十悪は、以上申すところの我々の善悪は残
らずが皆抵抗であるというところの我々の善悪は残
能く分る。殺生戒は何も形で生物を殺すばかりが殺生で
ない、自分は正義じゃというて飽くまで周囲をなみし、自
己を押し立てて行くも殺生である。するとその如き五逆十
悪の私が、如何にすれば救われるか。如何程苦心しても無
抵抗になりて安心する道はあり得ぬとすれば、その者が何
処で救われるか、これが肝腎の問題となるのである。

一四 私の最後に氣のついたことは

するとそのとき、

私が最後に安心を得た筋通を言うと『自分はこれまで人に
隔てぬようにしよう、打ち融けるようにしよう、我慢張ら

ぬようにしようと、様々思うたのであるも、結局、かくやればやるほど、我慢深く、名譽心深く、執念深い人間になつてしまつた。こんな恐ろしい心で人に向えば、如何な無我な人もあんな奴にはこり／＼だと果れられてしまふであろう」と、私はこの自分の絶対我慢の性分一つで行きついでしまつたのである。

故に私は飽くまで我慢でやりとおすドイツ主義(大正六年頃を参照)も感心せぬ。ドイツのはそれがどんな具合にあるのか、信者の人が「浅間しくてもお助けである。人間は生きてる限り悪は止まぬのじや」と平気で悪を打ち出して安心しているのも同じだと思ふのである。我々はそれが平気で出来る程ならば、初めから人生問題に苦心はせぬ。願わくばその我慢を無くしたいと思えばこそ苦心するの故、悪いままで安心出来るよう筈はないのである。しからばその悪が止められるか、止められない。そこで、最後に私の氣のついたことは、

『自分がこんな浅ましい心で人に向えば必ず呆れられ、見捨てられてしまふに決つてゐる。五分五分の人間の寄合いの人生故これでは永劫に安心の有りよう筈がない。

あわれ世の中に誰か一人、この執念深い自分なることを見て呉る者ありて、そのような争い深い自分なることを見て呉る者ありて、そ

病氣、災難、境遇、そう、い、う、冷、たい、もの、が、あ、る、故、そのために寒いと誰しも言うてゐるのである。それは成程、外界の風雪にもあるであろうが、そのため閉ざされて自分の身が既に冷たくなつてしまつたとすれば、それはすでに、自分の身が雪になり、氷になつてしまつてゐるのである。故に冷却されたる、氷の身、雪の自身を如何にすべきかの問題が、すでに自身についてしまつてゐるのである。

しかるにそれを忘れてみなが、境遇が悪い、人が悪いと、それはなるほど人も境遇も悪いのであるかも知れぬ。しかしそのため冷やされ、凍えついでしまつてゐる自身は、自身が氷、自身が雪、故に、その自分が触るれば、如何な無我人もあれ冷たいと遁げてしまわれるにきまつてると、問題はそこに出てしまつてゐるの故、ここ大いに注意しなくてはならぬところなのである。それは或は外界も悪いかも知れぬが、そのため冷やされ、凝結させられ、抵抗性で塊めさせられてしまつた自分であることが分かると、その抵抗性の自分の行く処、いかなる者も呆れ果て、おもてをそむけて逃げ出すに違い無いと、問題の肝腎はこの点にあるのだから、ここよく氣をつけなくてはならぬのである。即ち問題は外界の風雪を取り除く問題に非ず、そのため冷やされ凝結した自分が如何にすれば平安になれるか、救

のような争い深い、隔て深い性分なることを理解してくる者ありて、自分がこれ程の隔て根性で向かつて、そういう性分が氣の毒故如何に汝の方から隔てても我の方からは隔てぬぞという汝をいかぬとは言わぬぞと、自分の方からは性分故、どこまでも反抗するが、その反抗の止まぬのが可哀相故、その汝に我の方からは飽くまで無我で向うぞと、この無抵抗を以て自分に向かつてくる者はあるまいか」と、

茲で話がコロリと一転するの故、ここをよく氣をつけて頂かなければならぬのである。

一五 外界の風雪の問題に非ず、冷却せる自己の問題なり

ところで私の初め苦しんだは、私と人との關係であつた故、私の心持ちにおいては、むしろ自分は正しいのであるけれども人が悪いと、……丁度これからむこう寒さの氣候のように、外界に雪が降り、寒風が吹く。故にそのため自分の身も凍え、この通り冷たく、疑い深くされてしまつたのは、これは外界に於ける風雪のせいである。もすこし温い春風があるならばこうもなるまいに、この人生何処を眺めても氷や雪ばかりである故、この通り自分も寒くされてしまつたと。これは、我々外界に、

われるか。ここになりて、初めて自分の問題となるのだから、ここに留意しなくてはならぬのである。

一六 大悲は自己の問題が捨ておかれずとなり

これは皆様が、色々の苦しみをひつさげてお尋ね下さる場合に、私、

『成る程、それはそういう境遇に立たれては、成る程、貴方も残念に思われるであろう。お尤もである云々』と、斯く私の方から御同情申上げるのはそれは外界に横たわる風雪の問題を申してゐるのでは無い。そのため冷やされ、つめたくされてしまつた、その方御自身のことを申上げてゐるのである。なお申せば、その冷やされた寒い心で人に向かえば、今度は此方が人を寒むがらし、凍えさせてしまふにきまつて居るのである。故にこんな心で人に触れば、人が触つてくれるな、というにきまつてゐると、それで人生に行き処がなくなつて居る御同様である。そこへ『そうなたつたのが氣の毒のことである。成る程そのこじくられた性分では人に嫌われることであろうが、そういう嫌われる、冷い根性となり果てた処が同情に堪えぬ。よしその汝のその冷たきを何処までも捨てぬぞ、同情するぞ、その汝の冷たい限り何処までも温めなくてはおかぬが我なる

ぞ」と、
斯く私の冷たき、寒き所に同情を持って下されたが、今お
慈悲の問題なのである。こはかや、

或る勝気の方が、四方八方より迫害をうけ、上よりも、下
よりも圧迫せられて、おまけに人のした咎までも自分が被
らねばならぬ事になり『残念ながら頭下げて誰彼にあやま
ろう』と、心冷たく独り道を帰って来られたところに、丁
度雪の時分、雪道の所に、

一人の乞食の子供が立って居た。見ると傍に雪合戦して遊
んでいる大勢の町の子供が、みんなで乞食の子供に雪玉を
ぶつつけていじめている。乞食の子供は大勢にいじめられ
て泣いている。道の左右には戸の開いている家もあるが、
誰も乞食の子供を助けてやろうという様子も無い。

その人は『あゝ可哀相なことだ』と眺めていられたが、
『あゝこれは人ごとで無い、自分の今日の身の上である。
自分が今、世間からいじめられているのがこの様だ』と、
こう思うて居らるる処に、何処からともなく、母と覚しき
者がそこへあらわれたが、それを見るなり

『サア来い』……声かけるなり、乞食の子供は大声立て
て母親のふところに躍り上ってよろこんだ。
その人は、『あゝ自分が今これである。自分が敗けぬ気
が強く、人に手向いするため誰も相手してくれぬ。ここ

思われるであろう。お察しをする、御尤もである』
と御同情申上げる。ところが、

そこに面白きは、皆様の方では、外界のすべてが雪、氷故
そのため冷えきってしまった心では、誰が何と言おうと嬉
しいとは思えぬ。満足とは思われぬ。ところがこちらはそ
の冷え切った身体故、誰の前に持ち出しても満腹出来ざる
愚痴のやまざる『そこを見てやると言うのである』と、こ
こ初めは人生と私との問題である所へ、
思いがけなくヒョコンと慈悲で救い取られるの故、ここを
余程気をつけなくてはならぬのである。

一八 無限大悲の眞実とは

昔から伝える話に、親鸞聖人が、
日野左エ門の門前で行き暮れて、一夜の宿を請われたけれ
ども、主人の心、堅食にして聖人を寄せつけなかった。真
宗では名高い雪を、しとねに石を枕に御苦勞の話である。お
供していた蓮位、西仏の二弟子が、これほど辞を低くして
頼んでも応ぜぬとは言語道断と、仕方なくその夜は門前で
お明かしになることになった。すると風はいよ／＼つもの
り、雪は益々積る。二人のお弟子は聖人の御苦勞をお察し
して、歎き悲しむ。その時それ程寒くさせられた聖人が仰
せられた御言葉として伝えるところは、

『弥陀の五劫思惟の願をよく／＼案すれば、ひとえに親

へ大悲の親は、こうなった自分を辛かろう、冷たかろう、
心配するな、案するな、我能く汝をまもらんとは、ここを
かねて見てやろうとのお慈悲であつたか』と、これではか
らずも知らして貰われた実話がある。

一七 無限大の数を加えらるる

ここになると、

大悲の同情は実に積極的である。人生は消極——我々の無
抵抗は、無抵抗にするまでが抵抗故、消極でマイナスばか
り、
マイナスに何を掛けても結局何処までもマイナスである。
我々外界の雪や氷を除こうと、あつかえばあつかう程、い
よ／＼凍えるばかり、温かみは毫厘も出ぬの故、何処まで
も雪や氷の冷やかな人生である。それ故そのため冷えき
てしまつた汝自身が可哀相故、汝が如何に冷酷であろう
が、我慢張るうが、抵抗しようが、そうあればある程、そ
の汝がいよ／＼哀れと、

そこへ無限絶大の数を加えて来らるる。ここが最も分り難
き所なのである。ここは『こういうものをお助け』と、
唯空でこれを言うてものでは何にもならぬ。仏の方より、
実際にその御眞実を注がれるので無くしては、これは皆様が
我慢が止まぬと苦しまれるのに対し、私が仏にかわりて、
『それがどうしても止み難いであろう、そういうことが

嚮一人がためなりけり。さればそくばくの業をもちける
身にありけるを、たすけんと思召したちける本願のか
たじけなさよ』
即ち『この冷やかな、かく冷遇せらるる、この寒くつめた
い親鸞一人の心を御覧なされ、そのそくばくの業を持ちけ
る身にありけるを、これを哀れみてやろうと思ひ立って
下された御眞実のかたじけなさよ』と。即ち、
私はこの見て下さる御眞実者に遇い奉つたのであつた。私
などそれまで、自分がこれ程したのに人が見てくれぬと不
足起し、最後にはこれ程までして認められぬ人生では、敢
て人の下敷になつて滅び行く自分の一身は恨まぬが、これ
では世の中が成り立たぬ。こういうことが行われる人生で
は、設い死んでも瞑することが出来ぬと、

『それは無理ない。同情する、察するぞ』
と、昔の小説に能く幽霊が毎晩迷うて出て、恨みごとやう
たという話があるが、そのように思い切れぬ、残念な、我
慢な、迷うて出ねばならぬ、その冷たい心を、大悲のこゝ
ろ遣る瀬なく

『察するぞ！見てやるぞ！
そこをあわれに思うのだぞ』

と、そういう者に、無限大悲の心で何処へまでもやるせなく言うて下さるといふ、そういう御真実にてましますのである。

一九 同情は相手の冷かきの爲に、一点その温かさを滅殺せられざるもの

故に言いすぎるけれども、ここは何うしても、

他力の阿弥陀如来の五劫永劫の御真実ということを上げなければならぬ。全体私共、これは前から言うたのであるけれども、この頃殊に思うのであるが、それ程までに争い深く、隔て深き我々の心である。するとそれは、誰某には隔て我慢張るが、誰某にはせぬということはない。

一人に対してそれになると、四方八面に対してそれになるのである。光線はこの面ばかりに放射するのではなく、四方八面に放射する。氷はこちらには冷たくするが、あちらにはせぬということはない。すると私共、一度人生で冷やされると、誰にもその冷やかでむこうに決つてるのである。するとその冷やかさに、

同情して呉れる人にも、必ず冷やかでむこうに決つているのである。毎度出す諭えであるが、或一人が罪を犯して監獄へ行く。行ったために前科者となり、段々世の中を冷やかに考えるようになり、誰も自分のことを悪しく思つていふ。彼も思つていふと、終に世の中全体を疑い隔てて、

のか」と、かく申すと、そこに皆様が無意識に、

『喜ばぬと呆れられてしまふ』この思想が隠れて居るのである。『何故呆れられてしまふか』『仏よりはそれ程真実でして下さるのに、こちらには有難いと受けられぬではないかぬ、受けられぬと呆れられてしまふ』と、これになつていのである。即ち私共は監獄出た囚人で、心が冷え切つていゝるもの故『俺のようなもの、きつと人が呆れるに決つていゝる』『いや彼も俺を泥棒と思うとるに決つていゝる』と、こちらがすべてこの冷たさで、人を敵取つてかかつて行くの故、我々の赴くところ、行くところ益々悪しくはなるうとも、よくなりようはなくなつていゝるのである。

救われようは無くなつて居るのである。即ち折角親切で向つて来てくれる人をも、こちらばかり冷やしてしまふのだから。処がこの時、この者に対し『イヤ、汝のその冷やかになつたそこに同情を持つのである。汝が風雪に冷やされてつめたくなつたそこに同情を持つという上は、汝がその冷え切つてしまつたため人の同情が心よく受けられぬ。

その、

受けられぬ処に同情するといふの故、汝が如何に疑おうが、又向おうが、それを一点悪しくは思わぬ。益々その又向う処にこちらからは温かにする』と、即ちこちらから真実同情で向えば、むこうも有難うと受けようと、そう思わ

仇取つて考えてしまふようになる。そこへ一人の同情者があつて、同情してくれても、当人は同情されたと思つて居らぬ。あいつおかしな奴だなどと、きつと冷やかで出て来るに決つて居るのである。でこの時一方が、なんだ折角同情してやつても、そんなならせぬぞと、引込んでしまふのなら、

同情にならぬ。同情は、

「あゝあんな人間でなかつたけれども、不幸あゝいう気の毒な身の上になり、すっかり心の根底から冷えきつてしまつたものだから、人を見れば仇取る、あゝいう性分になつたのだ。それ故自分は如何に汝が我に振舞おうが、そうなつたを気の毒とこそ同情すれ、一点悪しくは思わぬ」

と、一方は氷で向うのに、その者に一方は飽くまで温情で向つて来てくれる真実である。即ち、同情の真実の方は、一方の氷である為に一点滅殺される、ころがない。ここが皆様が最もお聞き取り難い処なのである。

二〇 五劫永劫の御苦勞の意義

たとへば青年の方が言葉にこそ出さぬが『どうも先生喜ばせぬ』と訴えらるるに對し、私『それは喜ばぬ筈じゃこちらが冷たいのだもの。何故またそんなに喜ばねばならぬ

れるのであるけれども、向うは冷えきつて、

人の温かみを温かく感ずる力を失つてしまつて居る人間であるから、何程同情し、何程親切にしても、向うは何処までも有難うとうけぬ、満足とはならぬ。しかるにこちらは、そのなれない処がいよゝゝ気の毒と、そうあればあるほど、そこが捨て置かれぬ真実であれば、それをするに

は、

する人の方が無限に忍ぶ処がなくてはならぬ。即ち、仏の五劫永劫の苦勞といふことを、我々やすいことに思ひがちなのであるけれども、どうして、我々絶対の抵抗性に、無限の無抵抗を以て忍んで下さる真実が、五劫永劫の御苦勞といふことなのである。即ちこれが無碍といふことにて、

無碍とは大悲の心の故に、如何なる悪も碍害にならないといふことである。『歎異鈔』一章には、

本願を信せんには他の善も要にあらさず、念仏にまさるべき善なき故に。悪をもおそるべからず、本願をさまたぐるほどの悪なきが故に。云々。

これがうっかりすると『悪しくてもよい』になり易いのであるけれども、しからず、

悪をもおそるべからずとは、その広大の真実であるから、悪を気にせなとの意味である。向うが何程広大の同情で向

うて下されても、我々こちらが冷え切った人間故、こちらの冷やかさの為向うの同情が妨げられるのでは慈悲ならぬ。故に如何なる悪にも妨げられず、何処々々々でも、その悪なるところを見てやろうとの広大のお慈悲なれば、我々の如何なる悪をもつても碍ることが出来ぬところの偉大なる御心である。故に私共一たびこれに遇えば、如何なる有碍の抵抗性の私も、心の底から思召しの程に恐れ入って有難やと、初めてその御真実の程が知らせて貰えるとなるのである。即ち、

他方でいう、撰取不捨の味わいは、ここである。即ち先方がこれ程までの御真実の故に、如何なる私の冷やかさも、

この無限の仏の温かさのために融かされ、円融、円満、満足、無碍と、ここになると無碍の言葉が空でない。しかる

に私の考えでは、

他方真宗の教が広く行われてる割合に、ここを自身の自覚として、実験している人が少いようである。聖人は、円融

円満、頓極頓速。円頓の文字に註をせられて、

即ち『私の氷の有らん限り、飽くまでとわしてしまわねば

おかぬ』と、この思いがけない真実の温かみに遇えば、如何なる私の冷やかさ、悪しさも、頓極頓速と、一時に残らず

その御真実の程にかされ、円融円満、満足無碍と。しか

の仕て見よう無きを捉まえて、そこを御見捨て無き御真実であることを申し上げなければならぬのである。私などもここに

斯れ一つが分から無かつた為得られなかつたのであつた。

それは『これ程に思うて見てもこの我慢がやまぬ、隔てが止まぬ。この止まぬのがいかぬのだから、これさえ取れば

ば人生はよかるうに』と、即ち

私の方は何かすれば無抵抗に出来る気で、いつまでも抵抗して居つたのである。しかるにそれに対して、友人の方は抵抗せぬ。こちらは抵抗でいくの一方は飽くまでそれを気に碍えぬ態度で、何時までも優しくしてくれる。すると最後には私この心まで起こつたのである。

『これ程までに言うて貰えばもう善い加減止みそうなのであるに、これ程言われてもこの我慢がやまぬとは、

と、これが言いたくてならなかつたのであつた。皆様の中にはこれが有られようと思ひのである。すると慈悲ある人の方は、

『君も随分おかしな人だ。初めから君が隔てがやまぬから気の毒というてゐるのでないか。しかるにそう聞いたら止みそうなのは君何事か。隔ては君の性だから、何れだけなりと勝手に隔てて居り給え。こちらは何処ま

しこの処はなお申さなければならぬのである。

二一 抵抗性を取り上げられる一念

それ故、失礼なれども皆様がよく私の所へ御出で下されて『どうも人に不足が起つて困ります。人にひどい事をされたのが忘れられぬで困ります』そう言われるに對して私『それは無理ない、その抵抗の止まぬのは無理ない。そのやまぬ、しようのない処を見て下されたのが慈悲である。そこを見てやろうという者は人生に一人もない。しかるにそうして見ようなきそこを御覽下されて、そこを何処までも見てやるぞとの御真実である』と、こう一言申上げることによつて皆様の中には、『あゝかく私の抵抗性がどうしても止まぬ、あゝ止まぬここを見て下されたのが御真実であるか、有難い』と他力の徹底はここで出て来るのである。実例について言えば、皆様がお子さんを失われた時、私

はどう申上げるか。

『貴方お子さんを失われてさぞ残念ならん。若し助けられるものならば、貴方は全財産を投げ出し、一切を犠牲にしても助けたいと思われるであろう。その底の知れぬ暗黒、失望をあわれに思召し、察するぞ、見てやるぞ、そうして見ようのない暗黒の汝故、汝が暗黒の限り、何処までも見捨てられぬとある真実が大慈悲の仰せである』と。即ちここは私共人間最終の苦惱、抜き差しならぬ、そ

で行つても捨てぬと言つたら捨てぬのだから』

と。ここ一つ、突放なされて見ると、初めて向うの思召しの程が分つて抵抗が奪られるとなるのである。

それを我々『こちらが有難いと受けられれば、向うにも喜んで貰えよう』と、それなら慈悲と言つても五分々々の慈悲である。

汝に満足して貰いたいために同情する、という同情があるものか。親が子に善くするに、子に有難いと言つて貰いたいためにする親はない。いま子が難儀、罪を犯し、しようがない身だから親が飛び出して来たのである。出た以上は、如何に悪しかろうが、逆らおうが、引き受けたというた以上は引受けたと、ここ一方は、

初めから何処までも絶対である。即ちこの絶対の思召しであることが一点知らされると、『このような、自分の方から抵抗を止めて有難いとならぬ、これ程我慢の止まぬ、この者をそれ程に思召し下されたのか、有難い』と、ここになつて来るのである。即ち他方に於いて信仰徹底の結果が、『この何処までも我慢の止まぬ、このして見ようの無い者を』と、この機の深信となつて現れて来るがここであ

二二 『止まぬ』に非ず

『止まぬ』なり。

こは実例について言うと、この間も或る方が『どうも私は短気でいけません。これ程先生の話を聞いたら、いつかはやみそうなもの、すこしは取れそうなのと思ひますが』

と、こういうお話であった。私、

『それは誠に結構のお心掛けと言わんたらんが、併し貴方は私の話をこういふ風に聞いているのでしよう。仏のいわれるのは、短気は止まぬのだぞ、止まいても見て居るから心配するなと、こういう風に聞いているのでしよう』と申上げると『うだ』ということである。

『すると貴方は、そう聞いたら安心出来そうなもの。そう聞いたら止まぬもの、とそう思っているのでしよう』

『うだ』ということである。

『すると貴方は、どちらかといえば止んだ方がよいと思

うてるのでしよう』

『うだ』ということである。私、
『貴方、仏の慈悲に止まぬ、と聞いても、いかに如きおかしな事があるものか。貴方、それ程聞いて止めよう／＼と、それに貴方は血の涙注いで居るのであるも、それは止まぬが汝の性なれば、その止まぬが可哀相だのお慈悲なので

る。それが出来る程ならば救われぬかて仏に成り得る。

すなわち『悪いこととしてもよい』といつて居る方は横着である。この点より言う時は、矢張り何処までも悪いことはせぬ方がよい。が、

そのしてならぬ悪いことが、如何にしても止まぬ我々である。故に止まぬが哀れと、そこを見て下されたが、お慈悲なのである。故に『たゞ商いをもし、奉公をもせよ、獵すな

どりをせよ』……そこになると我々が、
政治、実業、教育、学問、何をしようがみな、あきない、りよう、すなわちである。我々は学問で飯を喰ひ、教育で飯を喰ひ、宗教で仏を売って飯を喰ひ。そういう浅間しいことをしていてもでない。それせざれば世に生きて行く能わざる浅間しき我々なることをかねて見て下されて、その者を、何処々々までもとお慈悲なのである。故に、

『かかる罪業にのみ朝夕まといぬる我等ごときのいたずらものを、たすけんと誓ひます弥陀如来の本願にて
ましますぞと深く信じ……』

即ちこのして見よの無い御同様が、この思召し一つで腹ふくれて、各々その生計に安んぜさせて貰えるとなるのである。

二四 秩序ある人生の眞解決

故に、トルストイ翁の言う如き無抵抗に出来ます、の、

ある。貴方、止まぬといつて短気を出したあと、いつでも残念々々と、そこはちつとも止まぬと仰言る方のお言葉
を聞かなくてはいかぬ。短気でも、でない。これほど止まぬ短気の性分故、あらゆる人に呆れられる自分をその故に仏ばかりはその性分をかほどまであわれみ思召す。
ここが親鸞聖人の言われる眞宗の眼目である』

と、お話したことであった。

二三 實際生計と御眞実

蓮如上人の『御文』には、
まず当流の安心のおもむきは、あながちにわがこころのわるきをも、また妄念妄執のこころのおこるをもとどめよというにもあらず。ただあきないをもし、奉公をもせよ。獵すなどりをせよ。かゝるあさましき罪業にのみ朝夕まといぬる我等ごときのいたずらものを、たすけんとちかいます弥陀如来の本願にてましますぞとふかく信じて云云。

とある。これを信者の人が誤つて、

『悪いことをしてもよい』とよりに取つて居るは間違ひである。悪いこととしてもよいでは安心出来よう筈はない。しかし反対に、

『悪いことしてはいかぬ、善いことせねばならぬ、無抵抗にするのじや』と、それになると思っているも間違ひであ

理想生活は我々には出来得ぬのである。ト翁の無抵抗主義は非戦論、最後には財産私有もいかぬ、裁判も罪悪である、と、そんなこと人間に出来るものでない。それが出来得ぬのが人間なのである。故に一寸聞くと大層よいようであるも、そういうことが出来ると思つて居るのが、

まだ自分の悪しさが認められて居ぬのである。しかるにややもすれば我々そういう思想に囚われて、無抵抗にしよう、と、そこになると、聖人の言われたには、我々が煩惱に縛られて苦しみて居るばかりが牢獄でない。善本徳本に囚われて、善いことをしよう／＼と言つて居るのも、善の鎖に繋がれて居るものである。

善の金の鎖につながれて五百歳の間牢獄を出ることが出来ぬのだということ言われてある。故に善いことも牢獄に繋がれているのだから気をつけなくてはならぬ。それはすべき善いことであるが、それがしようとなれば努める程、いよ／＼出来なくなるのが私共なのである。何程骨折つて見ても、短気一つが如何にしても止まない。故に、眞宗には戒なるものが置いて無い。善くするのが結構であるが、せいでもなら無戒ということは無いのである。全体戒行、座禅、我々が善く出来ると思つているのが間違ひである。その出来ないそこを見て、大悲の心遣る瀬なく、その者に広大の眞実を差向けて下されたが慈悲なれば、我々

は戒行修行の出来得ざる浅間しき獵すなどり。極言すれば國家の爲には鉦取りて、戦うべきには戦わなくてはならぬ者なのである。そのせねばならぬ浅間しき人間の寄り集まりの人生なることを見て下されて、その冷やかなるして見ようのない、そこを何処までも温めてやる、そのための我友情ぞと、この廣大救済の御真実なれば、我々この人生生活の上に於いて、やむを得ぬには敵を殺し、又殺されつつ、その者がこの恵み一つで安心させて貰えるとなるのである。

故に、人生すべての組織の上に、真の秩序ある解決を与える信仰である。

二五 人生生活と信仰

なおこは以前から思うのであるが、このト翁の無抵抗主義が妙なことになる、頗る変な思想になりはせぬかということを思うのである。むしろこの無抵抗思想だけに止まると、我々抵抗の罪悪であるだけは分るが、それから人生に真に踏み出すには、その、言うて我々の善なるものが倒れぬ限り、出られぬのだから、その結局が変なことになりはせぬかということを思うのである。強ち露国ばかりをいうのではないが、少くとも露国があんな具合になったことが、——即ち我から進んで戦争を中止し、兵備を解き、あくまでも形の上では無抵抗

難く思召す御真実の有りなりなのである。故に、他力はこの五劫永劫の御苦勞の御心が頂けたが他力の味わいとなるのである。

二六 無碍の体現は報土得生ののち

さてかく頂くと無抵抗は我々に出来ないことである。出来ない我々の抵抗に、仏の方から尽十方無碍の無抵抗で向かわれる故、如何な私も終にその思召の程に畏れ入りて、私の内面にその無抵抗が屈いて下された時が、徹底である。即ち、
願れる念仏はその屈いて下された反射である。故に一声の念仏も我々の方からするのでない。その心すなわち他力である。和讃には
信心すなわち一心なり 一心すなわち金剛心
金剛心は菩提心 この心すなわち他力なり。
即ち他力真実のお心が一念に我々の内面に届き、入り允ちて働いて下さるのである。真心徹到である。

真心徹到するひとは 金剛心なりければ
三品の懺悔するひとと ひとしと宗師はのへ給う。
我々は眼より血の涙を注ぎ、全身の毛孔より汗を流しての三品の懺悔は出来ざれども、この御真実を知らされた一念には、それすると等しいと宜うのである。また、
五濁悪世のわれらこそ 金剛の信心ばかりにて

的に、首捨じられてもどうせられても宜しいといった態度でやって、而して一方はそれに乘じて大兵を差向け、城下の盟をなさしめるが如き形勢をかもし来ったということ、形の無抵抗主義が妙な結果を来したとは思われぬかと申すのである。

故に我々は我からする善の立場では、一足も、一寸も行かれぬ。むしろその動くに動かれぬして見ようなき、冷やかさを知ろし召して哀れみ思召す如来の御真実を頂いて、それ一つにその者が満足させて貰うたうえからは、私が如何に行おうが、如何になろうが、自分の我慢でするのでない。そのして見ようのなきをお見捨て無き慈悲に安心させて貰うた上から、政治、実業、商い、獵すなどりそれをせねば立ちゆかぬ。

人生の立場になりてこそ、初めてその上から真実の人生生活がさせて貰えるのである。しかしこれを或人達が思うているように、何をしてもゆるされるのだと取りてはならぬ。むしろゆるされぬ我々の浅間しさである。そのために私は、
假令身を諸の苦毒の中に止むとも
我が行は精進にして忍びて遂に悔いじ。(大經)

と、その私であるために血潮を注ぎ『血潮を注ぐこと四大海水の如し』それは我々のその浅間しきを哀れみ、見捨て

ながく生死をすてはて 自然の浄土にいたるなれ。

金剛堅固の信心の きたまる時をまちえてぞ
弥陀の心光撰護して ながく生死をへたてける。

しかし、さきより私は、
その結果が無抵抗になったとか、出来たとかは、一言も申して居らぬ。むしろ何処までも抵抗の私に、向うが飽くまで無抵抗に臨まれる故、終に抵抗の私が頭下げて、仏に帰命し奉ったのが信心の姿である。即ちそれが罪惡観となつてあらわれて来る。しかしてその上からは、この御真実に計らわれまいらせて、この世をおわると肉体を離れて、真の浄土にまいらせて貰う。即ち、いよいよ、
無抵抗が真に身に行わせて貰うようになれるはその時のことである。その境にゆくまでは、信仰頂いても何処までも我々は罪惡の者である。ここが非常に味わいのあるところ。

信仰の一念に我々が忽ち理想を満足して、思うさま行えるようになるのならば、それなら現身成仏である。それは我々の出来得ないこと。故に私の信仰はこの世にある限りは、我々は罪を造りての生活であると申上げる。けれどもその者を何処々々までもの御真実の故に、その者がやる余地なく満足安心して過ごさせて貰える。ここを飽くまでおとさぬようにして頂きたいことである。

二七 不断煩惱得涅槃

ここを私は常に借金の譬で申上げる。我々の罪悪は借金のようなものである。如來の御慈悲はその借金で仕方のないのを哀れみて、これを払うて下さる眞実の金のようなものである。これは現に『大經』にも

「衆の爲法蔵を開いて、広く功徳の宝を施すことをいたす」

と言われてあつて、我々はひやかな者、乏しき者、借金持ちである。その借金でしようのないのを哀れみて、広く功徳の宝蔵を開いて、その借金を救い、払い、満足せしめて下さるが仏である。こは如何にも変なたとえであるも、仏とは何かというに、我々の冷やかなるを温めてくれるものが太陽、乏しきを救うてくれるものが金持である。金持が如何に宝が沢山あつても、貧しきを救うてなければ救いの金持にはならぬ。故に今、我々の、

我々のして見よなきを救済の仏である。大慈悲の仏である。衆生を救わんがために本願を興し、衆生を救わんがために永劫の修行して、仏と顕れ出で給いたる、救いの仏である。故に我々のこの冷やか、缺乏を何処までも見て下さるうとの仰せである。故にその仏を聞く一念に如何なる我々の缺乏、借金も必ず満足させらるると。斯く言うて能く青年の方が、

の意味である。故に邪見に聞いてはならぬも、一念信仰に徹すれば、

うみかわに網をひき、釣りをして世を渡る者も、野山に猪をかり、鳥を捕りて生命をつなぐ輩も、商をもし、田畑を作りてすぐる人もただ同じことなり。さるべき業縁の催せば、いかなる振舞もすべしとこそ、聖人は仰せ候いし云云（歎異鈔）

その浅間しきを何処までも脱れ得ぬ我々なることをしろし召し、お見捨てなき御眞実の故に、その浅間しきが恐れ入り安んじて、その上からは眞実信順の生活を辿らせて貰えらるるのである。併しながら一歩たりとも「悪をしてもよい」と、許容を与えられたる如き思想が難つたら、非常な間違いとなるのである。

大正七年十二月十五日 発行、求道。所載。



信仰頂いた上は、もう借金は出来ぬのですか、罪悪はせぬのですかと聞かれる方がある。矢張り借金は際限なく出来るのだとすると、折角今までのを払うて貰った詮がなくなると、出来ぬのだとすると、煩惱がないことになって、ここが心配に思われるのである。

ここは好いところである。我々信仰以後は満足しや、もう借金は出来なくなりて仏は要らなくなるのかというに、否矢張り際限なく煩惱は起り、借金は出来るのである。す

出来たらも通り、駄目になつてしまふかというに否。眞に私を哀れみて借金を引受けてくれる人が、汝の現在の額の額は引受ける、将来のは知らぬぞということは無い。眞の救いのお心は過去・未来・現在、汝がこの後如何程出来ようと、出来る限りみな引受けるぞとある御眞実である。故に『正信偈』には、

能く一念喜愛の心を発しぬれば、
煩惱を断ぜずして涅槃を得るなり。

「不断煩惱得涅槃」は、煩惱が止まなくてもよいという意味ではない。「斯く何処までも止まぬが汝の性分と見たにより、汝が借金の出来る限り、過去・未来・現在、何処までもみな引受けたぞ」。この絶対の大悲を聞けば、その者がその一念に煩惱を断ぜずして涅槃を得させて貰われると

信仰静観録

誉田豊吉

感化の根源

感化の根源は仏の慈悲にある。仏の慈悲を知らない以前の学問修養は、皆生命のない形骸である。我が身は罪悪の塊である。我等自己の力では、人を教育し感化することは出来ない。たとい多少賢愚の差異はあるも、何れにしても不完全な人間同志、畢竟五十歩百歩である。若し我等にして人を感化し得べしと思わば、それは我が身知らずの甚だしいものである。若し自己の拔擢や学問や徳望を以て、人を感化しようと企てたら、必ず失敗に終るだろう。

我等は、我も仏の慈悲を信じ、人にもこれを信ぜしめようと図るべきである。この信念より出する事柄は、すべて無理のところなく、おのずから人を感ぜしむる。自分の我慢によって、どうして人を感ぜしむることが出来よう、い

わんや虚偽権謀術数をもつてするをやである。

水は自ら其湿えるを知らずして他を湿し、火は自らその熱きを覚らずして他を焼くように、眞実の慈悲は慈悲を忘るる、古の人の言つたように、眞実の教化は教化を忘れたるところにあらわるる



あとがき

師走となりました。釈尊の成道会が十二月八日には各地で催されております。又太平洋戦の開始の日にもあたります。

近角先生は十二月初めに、大戦開始の寸前にお亡くなりになり、日本仏教の前途、日本国の危機を御心痛の中に、念仏成仏せられました。

まことに私共には十二月は悲喜交々の日であります。この時、近角先生の大正七年十二月に「求道」誌に發表せられました御原稿を頂き特掲号とさせていただきます。

○ 大正七年には歐洲大戦の休戦条約が成立し、ロシア革命のためバルチザン事件がおこり日本軍がシベリヤに出兵した年であります。更に私共の記憶に深いのは、日本各地に米騒動がおこり、当時中学生だった私共は、外来米の臭いのを食べながら、どうなるだろう、と語り合いました。

こうした騒然とした中において、近角先生が思想の根本問題を提唱して下さったのであります。先生の悲心如何ばかりでありましたことか。然しこのことは、現在の世界と日本においても一大事の問題であります。

して、先生の御忌月に先生の御提撕をあたらしく蒙りたいと願いました。

○ 今度万場一致で再選されましたウ、タント国連事務総長が、最初の就任の時「自分は正しい、相手は間違っているという考えに立っ限り戦争が続く。互に不完全である」と反省するところに平和への話し合いがひらける」と宣言した。これは聖徳太子の「我是なり彼非なり」と争うが「共に是れ凡夫のみ」との金言に通じますが、近角先生の所載の御講話は、このことを徹底的に教えて下され、且つその者への救いをお知らせ下さるものであります。

○ 去る十一月四日に私共が京都の学生親鸞会を結び、聖鸞寮に生活してました頃、献身のお世話をして下さった塘さわ様が、交通事故にあわれ、脳底骨折で亡くなられました。又、十日には渡辺種彦さんの奥さんも脳血栓の再発作で静かに念仏の息たえおわれられました。ハラハラと散る紅葉と共に、人の世の無常を教えられつゝお別れいたしました。「一葉落ちて天下の秋を知る」詩人の敏感さもなく、徒らに馬蹄を重ねる身にも、御生命をかけてのおおしえは身にしみることあります。

御案内

○一月八日、十五日、の日曜を

※ 一道会の例会
といたします。第一日曜は休ませて頂きます。

○ 毎月二十四日午前午後、昭和区小桜町
※ 教西寺法話会。

○ 信仰余瀝 定価 三七〇・千五〇。
懺悔録 定価 三〇〇・千五〇。

○ 京都文明堂 振替 京都七七三四。

定価 半年 二百円(送共)
一年 四百円(送共)

名古屋市南区駈上町二ノ八八
編集・発行人 花田 正夫

電話八二二局七〇三七番

愛知県西加茂郡三好町大字福谷
印刷 入 本田 政雄

名古屋市南区駈上町二ノ八八

發行所 慈光社

振替口座名古屋一〇四七〇番